

	公募シンポジウムⅩ	E 会場
タイトル	卵子提供における収奪構造 —ドキュメンタリーフィルム『卵子提供：美談の裏側』による問題提起	
氏名 (所属)	オーガナイザー：柳原 良江 (東京電機大学)	45 分 (映画 40 分を含む)
	報告者： 1 入江 公康 (武蔵野美術大学)	10 分
	2 小椋 宗一郎 (司会) (東海学院大学)	5 分
	パネルディスカッション	0 分
キーワード	卵子提供、収奪、暴力、人体の商品化、代理出産	
— 概 要 —		
<p>本シンポジウムでは、米国の NPO 団体が制作したドキュメンタリー映画『Eggsplotation』の日本語字幕版である『卵子提供：美談の裏側』(本セッションオーガナイザーが翻訳・監修)を上映し、その内容を手がかりに、我々の社会が内包する、女性の身体利用が持つ倫理的問題を不可視化させ、女性からの収奪を制度化しようとする構造や、そこに介在する力学について議論を行いたい。</p> <p>近年は日本でも卵子提供による妊娠という方法が知られるようになってきた。しかし一般的にこの方法が語られる際には、卵を望む不妊治療者の願いや、女性のライフスタイルの多様化など、ポジティブな面ばかりが強調され、もう一人の当事者である卵子を提供した女性の抱える問題の実態は不問に付されている。</p> <p>一方、米国では 2010 年に NPO 団体である生命倫理文化ネットワークセンター (The Center for Bioethics and Culture Network、以下 C B C) により、卵子提供者へのインタビューからなるドキュメンタリー映画『Eggsplotation』が発表された。日本と同様、本問題に関する視点の偏在が指摘されてきた米国だが、本作品により、ようやく卵子提供の当事者たちが抱える現実が語られる様になり、行為の実施に伴う問題が表面化するようになっていく。</p> <p>作品中では、卵子を提供した女性達へのインタビューを中心に、卵子提供の実施がもたらす問題や、マス・メディアでは扱われなかった論点が浮き彫りにされている。具体的には、提供者たちが、卵を提供したがゆえに自らの妊娠能力を失ったり、死の危険に晒されるなど、深刻な健康ダメージを被っている姿が描かれている。また、不妊治療医やあっせん業者が、十分なリスクや科学的考察を伝えないまま若い女性の身体を資源化し、不妊産業が拡大し続けている現状が扱われている。</p> <p>このような内容ゆえ、本映画は現在までに、一般的な商業上映はもちろん、米国内外の大学、研究機関、人権団体によって上映され、そこで描かれる卵子提供の現実が、学術的議論の場でも大きな話題を呼んできた。その反響は大きく、実際に米国内における法整備にも影響を及ぼしている。</p> <p>こうして本映画が伝える卵子提供の現状と、それらが米国の議論に与えているインパクトを鑑みると、本映画が明らかにする現実や問題点は、日本における法整備を考える上でも重要な論点を与えるに違いない。それゆえ本シンポジウムでは、本映画の日本語版『卵子提供：美談の裏側』を、日本語版制作者である柳原が上映した上で、入江が「収奪」の側面からコメントを述べる。それらを手がかりに、卵子提供の持つ問題点、そこに存在する力学、そして今まさに、卵子提供を含め「第三者の関わる生殖技術」の容認に向けて作成されている法案が包含する哲学的問いについて議論していく。</p>		

	公募シンポジウム区 卵子提供における収奪構造 ードキュメンタリーフィルム『卵子提供：美談の裏側』による問題提起
演題名	『卵子提供：美談の裏側』日本語版制作の背景 —「生命倫理学」が問うべきもの
氏名(所属)	シンポジスト：柳原 良江 (東京電機大学)
専門分野	社会学
キーワード	生命倫理学、卵子提供、代理出産、世論、収奪
— 発 表 要 旨 —	
<p>映画『卵子提供：美談の裏側』日本語版は、生命倫理学や死生物学を専攻する研究者から成る「代理出産を問い直す会」により制作されたものである。本会は、発足メンバーたちが 2007 年から 2008 年にかけて、日本国内で代理出産が活発に論じられていた際に抱いた違和感に端を発している。人々の生命活動、また生まれる人の存在そのものを契約の対象とする代理出産は、本来、人文社会系の生命倫理学者こそが最も敏感に反応し、より丁寧な議論と踏み込んだ考察をすべきテーマであるが、その当時、学術的な議論の主体は医療者や法学者に任されていた。</p> <p>このような状態の中で、代理出産に対する生命倫理学の議論では、優生学からの反省、人体実験に対する考察、医の倫理や手続きの確認といった、従来、生命倫理学が紡ぎだしてきたはずの知が無視され、娯楽要素の強い文化表象による意見がヘゲモニーを握っていた。生命活動の収奪が臆面もなく「恩恵」「福音」といった美辞麗句で語られるばかりか、それを誰も批判しない名ばかりの「生命倫理学」が常態化していた。本会は、こうした現状を目の当たりにして、当時の代理出産をめぐる生命倫理学のあり方に疑問を抱いた若手研究者たちが、真に学術的な活動を行い、この行為の問題を明らかにする事を目的として設立したものである。</p> <p>しかしながら、2010 年に野田聖子衆議院議員がメキシコ人女性の卵子を購入のうえ妊娠、翌年男児を出産した一連の出来事がマス・メディアで報じられると、それに対する世論や生命倫理学の周辺では、代理出産の時と同じ構造が繰り返されるようになった。この現状を前に本会は、代理出産の時と同じ危機感を抱くと共に、真に語られるべき議論を行うには、この問題を一般市民はもとより専門家に向けても、より分かりやすい形で積極的に伝えることが必要と考え、既に米国で話題になっていた本映画の日本語版制作を思い至った。</p> <p>本映画が取り上げるのは主に卵子提供者が直面する健康リスクだが、本作品の存在意義は、医学的リスクの指摘、そのものではない。卵子提供が娯楽メディアを通じた気楽な論調で認識される一方、それらの行為の裏にある現実を誰も検証せず放置し、結果的には、卵子提供で利益を得る人々の思惑により、人体収奪制度が維持される姿を描き出すことにある。</p> <p>米国を舞台とする内容だが、果たしてこれを外国だけの問題と切り捨てることが出来るだろうか。映画で描かれるのと同様、娯楽メディアや直接利益を得る人の意見に同調するばかりの日本の生命倫理学もまた、問題の共犯者と言えるのではないか。本作品を通じて、卵子提供や代理出産に対し、日本の生命倫理学者が本当に議論すべきことは何かを考えていきたい。</p>	

	公募シンポジウム区 卵子提供における収奪構造 一ドキュメンタリーフィルム『卵子提供：美談の裏側』による問題提起
演題名	資本と卵——生を調達する市場／暴力
氏名(所属)	シンポジスト：入江 公康(武蔵野美術大学・立教大学他兼任講師)
専門分野	社会学・労働運動史・社会思想
キーワード	医療・資本・卵子提供・斡旋業者・貧困
— 発表要旨 —	
<p>卵子提供をめぐる酷薄な事実を、ドナーたちからの——赤裸々かつ丁寧な——インタビュー構成によって明らかにしたこのドキュメンタリー映像は、現在日本においてまさしく「美談」として喧伝されはじめた代理出産の「肯定的」趨勢に歯止めをかけるべく、すべての女性たちによって共有されてしかるべきだろう。</p> <p>畏は何重にも張り巡らされている。提供にかかわって斡旋業者、直接処置をおこなう医師、医療スタッフはいうべくもなく、さらに生殖技術の進展を言祝ぐ研究機関や大学もまた、構造的にも実際的にも共犯者だ。それを後押しし、見て見ぬふりをし、野放しにし、そしてお墨付きを与えようとする行政、メディアが徹底的に批難されねばならない。映像を追っていくならば、卵子提供をめぐるドナーにたかるさまざまなアクターたちは、ここでただ「犯罪者」としてしか存在していない。</p> <p>提供のプロセスは欺瞞に満ちており、甘言、詐欺、騙取のオンパレードである。医療上のリスクは伝えられることなく、採卵後も彼女たちの健康が顧みられることはない。他人への奉仕という美名の下、彼女たちの身体は蝕まれ、回復不能な破壊を被っている。</p> <p>米国の場合、提供の理由は生活苦と学資捻出のためである場合が多いようだ。みてわかるように、そこには貧困問題が厳然と横たわる。生命倫理とはいいいながら、管見のかぎりでは、日本でこの分野は単に医療技術上の視野の枠内に限定され、それこそ問題を“技術的に(専門用語を駆使して小器用に)取り扱う”という振る舞いに終結してきた感が否めない。</p> <p>卵子提供が商売と化しているということ、儲けの出るうま味のあるビジネスになっているということ、潜在的な市場がそこに存在するという——どれをとっても「資本」を問題とせずには倫理は真の意味で問えないにもかかわらず、そこを閑却する議論が横行している。今回のこの映像はそうした問題も含めて丹念にそのプロセスを追跡することで、鮮やかにそれらをクリアしている。</p> <p>以上、“Egg exploitation”(「卵子提供——美談の裏側」)が眼前に突きつける事実は、卵子提供において女性たちが体験するプロセスは暴力以外ではありえないことを余すことなく暴露している。前年度の生命倫理学会大会において、演者は「植民地的生」というタイトルで、「再生産」に関わる女性の身体の天然資源化、その際原蓄(的暴力)について論じた。この良質なドキュメンタリー映像は間違いなくその裏づけとなるものだ。日本でも同様に、「美談」であるかのごとく、無邪気に——ということは暴力的であると同時に極めて欺瞞的に——進められつつあるこの事態を、前回のテーマを延長させる形で論じたいと考えている。</p>	